

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	15
瑪瑙集	27
紅玉集	30
9月号月評	32
恵贈句集拝見(78)	34
恵贈俳誌拝見(44)	36
特別作品「アメリカ鉄道の旅」Ⅱ	38
琥珀集作品鑑賞	40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	41
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ	42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	43
他誌転載	46
「はなぞの」での俳句の勉強会	48
イザナミの言語学(9)	50
芦屋虚子文学館吟行記	52
俳誌交歓	54
琵琶湖俳句サロン	55
エッセイ「羽根つき」	56

今月の一句

鴟の下なげき乙女の伏身像 桂 樟蹊子

(昭和六十二年作)

造形芸術にも詳しい師であり、ことに碌山美術館は度々訪れられた。碌山は二十五歳でパリへゆき、ロダンの指導を受けるが、三十二歳で胸を患い亡くなったため作品は少ない。なかでも伏身の乙女像「デス・ペア」(絶望)がお好きでよく話題にされた。

美しいなげきの乙女の姿態は胸を打つものがある。久方ぶりにこの句に接すると、いま一度この像にまみえたいと願う気持ちが湧くと湧く。

隆子

越前焼窯元

塩路隆子

土捏ねる五指の自在やみどりさし

休み窯柞のつくる大日蔭

梅雨蝶や窯入れを待つ素干し壺

轆轤辺に坐り癖ある円坐かな

越前の湯に浸りつつ新樹の香

甕酒を封切る夕べ風涼し

閑けさに夜鷹ひと声陶師の居

九月号光耀抄

塩路 隆子選

戦前の浪速に生まれ祭鱧
松蘿吹かるるばかり木地師邑
黙々と修羅場演じて蛍の火
長寿課に書類提出夏帽子
桔梗や口縄坂の文学碑
伝統の扇骨の里蝉しぐれ
明珍の風鈴の音や城下町
官兵衛に沸ける播州七変化
ガーベラの直立不動留守を護る
錆匂ふ鉄路の脇のカンナかな
龍の眼に射竦めらるる背に汗
青すだれ向う三軒掛け揃ふ
緑蔭に番の矮鶏の砂遊び
五月晴の赤土コート鳥の影
山野に礼の掛け声に湧く夏まつり
吹き抜くる古代の風や尊池
笛太鼓響く緑蔭宮家寺
日傘閉ぢ願ひ一つの地藏尊
梅雨晴間アウトレットのストア混み

阪本 哲弘
小澤 菜美
北尾 章郎
能勢 栄子
坂根 宏子
増田 一代
宮崎左智子
坂上 香菜
山口キミコ
西郷 慶子
橋本 靖子
国包 澄子
中村 ふう子
宮田 香
松岡 和子
和田 郁子
伊藤 和子
渡部 法子
竹内 悦子

獅子岩に色添へ林泉の青楓
 立葵大空にジャズ聞かせける
 ひらがなの軌跡を描き蚩かな
 浮輪持ち浜まで百歩父子駈くる
 鱧寿司や節の器を引き立たせ
 夕焼けつつ雄叫びあぐる親鴉
 葎の原姿見せねど水鶏鳴く
 梅雨晴間湯浅の町に醬油の香
 農終へてよもやま話青田風
 ありなしの風に戦げり夏の萩
 水鶏鳴き恋の始まる雨の夜
 労ひのビール黙して注ぎにけり
 三界の風を隔ちて床青葉
 紫草の小さき花や万葉歌
 万緑や廃工場の寂び姿
 野心などとうに捨てけり冷奴
 妖怪凶鑑繰る子に迫る夏の闇
 雷鳴の轟く空のスクリーン
 玉葱の祖の碑や緑蔭に
 蓮の葉のそよぎに風の道を知る

辻 知代子
 中井 弘一
 中井 登喜子
 中川 すみ子
 秦 和子
 福本 すみ子
 三川 美代子
 山崎 里美
 山本 孝夫
 栗倉 昌子
 飯田 美千子
 石川 かおり
 伊東 和子
 笠井 清佑
 笹井 康夫
 塩路 五郎
 鈴木 照子
 森下 康子
 川崎 利子
 木戸 宏子

山籟は空のせせらぎ木下闇
 頂上に生るる蜻蛉の千の舞
 三光鳥の声の訝やダム溷るる
 総玻璃の天空カフエにアイスティー
 土くれと跨げば動く畑蛙
 盆櫓に父の囃子の昔かな
 観音を巡る山路や道をしへ
 鉄線花犬に曳かるる老婦人
 蚩草手折らばほろる響くかに
 沖繩へ祈りのひと日蚩舞ふ
 訪ぬるは日傘の異国宣教師
 風鈴の音ばかりなりひとり住
 青梅は輝く翡翠葉にのせて
 黒雲や数多の雹が戸を叩き
 時空超え秘仏の開扉新樹光
 ばら色のスカートを巻き薔薇を見に
 古扇開けば紫ほのかな香
 池巡る蜻蛉の羽化を畏れつつ
 緑蔭に身を潜めたる鹿の群
 総門に名残の下馬碑つつじ咲く

大島みよし
 谷口俊郎
 杉本綾
 井口淳子
 中本吉信
 西田史郎
 伊藤純子
 吉田宏之
 稲田和子
 伊藤憲子
 高谷栄一
 田中浅子
 辻香秀
 土井久美子
 十時和子
 西垣順子
 西村敏子
 人見洋子
 平井紀夫
 藤本秀機

お百度のこより百本汗にじむ
星空に吸ひ込まれたし月見草
ワルツ曲奏づる少女ばらの花
仏陀立つあぢさゐ坂や海光り
入口の三和土を走る蜥蜴かな
泡として消えたきときも水中花
子ら遊ぶ声も姿も簾越し

「太陽の季節」は遠し夏の海

鉦祭稚児は凜々しく千度の儀

空の色千変万化揚花火

嬉々として籠一ぱいのおんずの実

伏せ甕の果てしなき黙竹落葉

幽霊も涼むのならば歓迎す

父の日の加賀の「柴舟」昼三時

新樹下の孔雀の揺らす羽の艶

風そよぐ水辺の詩情花菖蒲

吾が足を迂回して行く蟻の列

心太友の愚痴るを聞き流し

変はりなきは良きかな枇杷の実だくさん

梅雨晴間つくばる翠玉色をなし

松田 和子

松田 洋子

宮濱 安子

森田 利和

山崎 真義

山下 潤子

山田 愛子

山本 丈夫

横田 矩子

大越 義雄

大谷 信子

落合 晃

大堀 賢二

大松 一枝

片岡久美子

桂 敦子

小西 和子

小林 久子

佐用 圭子

鷺見たえ子

琥珀集

梅漬けて

小澤 菜美

吾を見て鶴の笑ひや昼中州
昼寝などさらさら明治の祖母育ち
ゼラニウムの赤の数多を寂しめる
梅漬けて母の二倍を生きる気に
真向へる虹をなぞれば灰と消ゆ
魔界めく牛蛙の声住み古りて
松蘿吹かるるばかり木地師邑

祭 鱧

阪本 哲弘

父の日やメールの一語入りたる
夏座敷に世界遺産の和食かな
止り木に揺らすグラスや桜桃忌
すててこの主懇勤に電話置く
袖通し奴となりぬ宿浴衣
ライオンの正視に外すサングラス
戦前の浪速に生まれ祭鱧

蛭 火

北尾 章郎

明滅の蛭百とも二百とも
黙々と修羅場演じて蛭の火
夕焼くる木曾三川や観覧車
眠薬に早き目覚めの時鳥
大球の四葩一茎備前焼
さくらんぼの苞を喜ぶ元酒豪
諍ひの種撒く国や半夏生

大百足

能勢 栄子

扇骨の里

増田 一代

初夏の富士くまなく探す靄の中
冷蔵庫開けては閉づるひとり住

宿泊は鷗外旧居夏の月

洋皿にオランダ風の茄子炒め

棚経を終へたる僧へ冷茶酌む

心地よき寝込みを襲ふ大百足

長寿課に書類提出夏帽子

天王寺七坂巡り

坂根 宏子

冷 奴

宮崎左智子

天王寺の七坂巡り梅雨晴間

石畳の難波寺町のうぜん花

桔梗や口縄坂の文学碑

七坂の三社の茅の輪願かくる

愛染さん祭控へて大わらは

難波にも紫の花ジャカランダ

スタンプラリー終へてハルカス雲の峰

駅までの道真つ直ぐに月見草

寄り道の森の図書館緑蔭に

家苞に鰻購ふ道の駅

夕顔の開きははじめや扇子店

夫に留守頼みでの旅梅雨あがる

夏の日に遊べるむかし近江舞子

伝統の扇骨の里蟬しぐれ

じゃが薯の花の魅惑や北の旅

空の底棚田に映し天の川

葱茗荷添へて日暮の冷奴

ゆで卵むきつつ遠き祭笛

明珍の風鈴の音や城下町

紫陽花の満面の笑み雨しづか

空元気鉾の街ゆく独りぼち

鮎の宿

坂上 香菜

カンナ

西郷慶子

日暮門の鱗鱗彫刻ビール欲し(西本願寺・国宝)

飛雲閣へ案内の僧や青時雨(西本願寺・国宝)

梅花藻や西行水へ雨の道

螺子巻けば鳴るオルゴール館涼し

引揚の岸壁の浦女梅雨

官兵衛に沸ける播州七変化

丹波路の鱒鮎とワイン鮎の宿

七変化

山口キミコ

大暑の日

橋本 靖子

ガーベラの直立不動留守を護る

三室戸寺の一山妖し七変化

一万株の花の寺なり四葩咲く

汗みどろ葛城古道行者徑

葛城の高嶋神気涼しかり

富雄川軽嶋親子屯せる

薔薇数多片仮名文字の読み難し

鷺の白かぞへ野川の浅瀬かな

たつぷりのタバスコをかけ日焼の子

おとうとがあにを負かすや心太

錆匂ふ鉄路の脇のカンナかな

お大尽の背中が笑ふ川床あそび

少年の影が羅漢に苔の花

落つる日やカンナを殊に燃やしけり

路面電車を抜きつ抜かれつ大暑の日(自転車で堺七句)

海を恋ふ晶子真白き百合が好き

龍の眼に射竦めらるる背に汗

憧れのミュシヤ展を観る夏の昼(アルファンス・ミュシヤ)

汗拭きつ天皇陵を俯瞰せる

仲庵のお薄一服半夏生草

梅雨晴間サイクリングで仁徳陵

六月の赤き月

国包 澄子

「うり坊」てふ手に載る冷し西瓜かな

里の道日毎植田の青深め

青すだれ向う三軒掛け揃ふ

父の日や主はとんと酒量減り

蜘蛛の囀の糸緻密に織りなせる

天空の闇六月の赤き月

闇香る月下美人の艶ひと夜

暑氣払ひ

中村ふく子

隠沼のみどりの影や桜桃忌

這ひ登るでで虫城を見にゆく気

藪蔓の補食袋や蠅の贅

等分に分くる手速ささくらんぼ

日の匂ひ茅の輪の匂ひ潜りけり

塩納豆一粒食みて暑氣払ひ

緑蔭に番の倭鶏の砂遊び

白夜

宮田 香

王国の白夜城壁そそり立つ

庭球の観客なべてサングラス

キスをして蕃茄挽ぎ採る朝の畑

信念は変わらぬままよ半夏生草

雨ふふみ重げに揺るる花さびた

五月晴の赤土コート鳥の影

入梅の濁流大河音にぶき

サンヤレ

松岡 和子

山野サンヤレに礼の掛声に湧く夏まつり

罌鑠の秘訣は蝮酒の効

鳴子にてすいか盗人御用とな

川風も山風もあり青田かな

小判草義賊気分で分け与ふ

夏草やあるやなしやの獣道

第九条永遠に伝へむ夏の空

蓴池

和田 郁子

色変はるほどにおもたげ濃紫陽花
 おぼつかなき園児自転車半夏生草
 吹き抜くる古代の風や蓴池ぬなわ
 浮島の冥き息吹や蓴池
 糸蜻蛉飛び交ふさまの舞へること
 すき間よりすつくと咲ける蛩袋
 竹夫人横に爆睡球兒かな

焼き鮎

伊藤 和子

焼き鮎の背骨ぬく技貴船席
 苔胞子息するさまに梅雨を浴び
 ふうはりと闇に休みて蛩の火
 雨あとの若竹すくと皮をぬぐ
 笛太鼓響く緑蔭宮家寺
 落し文見つけて草に返しけり
 夕暮れや花十薬の道案内

水無月

渡部 法子

勝利なきサムライブルー梅雨湿り
 日盛の小さき寺にツアー客(鈴虫寺)
 日傘閉ぢ願ひ一つの地藏尊
 機智に富む法話に拍手夏座敷
 竹林に夏うぐひすの高らかに
 夏の夕夫を待たせて美術館(黒田清輝展)
 カンバスの優しき女人日日草

夕立来る

竹内 悦子

夕立来る逢坂山を攻めあぐね
 旅の間に青田随分伸びてをり
 大切な扇子袋や妣のもの
 をさな嬰と茅の輪をくぐる旅帰り
 五月闇クレーン止まるお昼どき
 旅の留守新聞止めて梅雨の家
 梅雨晴間アウトレットのストア混み

瑠璃集

ヒマラヤの空

ヒマラヤの空恋ひ咲ける青き罌粟
熊除けの鈴鳴る登山バスの中
夜の壺の向日葵眠る事知らず
妖怪凶鑑繰る子に迫る夏の闇
をんな湯を低空飛行燕の子

鈴木照子

空のスクリーン

迷彩のシオルダーバッグソーダ水
雷鳴の轟く空のスクリーン
冷スूपにはじまる夜のフルコース
蝶遊ぶ里の空気の緩やかに
白南風や術後視界の白ブルー

森下 康子

風車村

ルピナスの紫の風風車村
玉葱の祖の碑や緑蔭に
梅雨ぐもり眠れる母の誕生日
日々忙し負けぬ気概の土用丑
板花や花や人の心の行き違ひ

川崎 利子

蓮の花

静かなる池に水音蓮揺るる
蓮の葉のそよぎに風の道を知る
ひまはりや晴れたる空へ背の高き
乾杯の梅酒平成二年もの
増水の川をくちなは流れ行く

木戸 宏子

芭蕉句碑

山籟は空のせせらぎ木下闇
碧天へ背伸びするかに今年竹
万緑の森を従へ古刹かな (横浜市天宗寺)
万緑に抱かるる芭蕉句碑に触れ
薄く眼を開く地蔵や木下闇

大島みよし

九月月号評

塩路 隆子

今回の月評は「瓊」当初から会員であった人達の作品に絞ってみた。格調・幽玄美などを備えた句になつていゝることに注目いただきたい。

戦前の浪速に生まれ祭鱧

阪本 哲弘

作者は太平洋戦争を挟み、ご両親を五十歳代の若さで亡くしまつたお兄上も同じ五十五歳で亡くしておられる。これらは第一句集「山ざくら」のあとがきに書かれていたが、祭鱧に繋がる作者の思い出にはご健在であつたご両親やお兄様を切り離すことはできない。毎年この時期には作者の脳裏にこれらの思い出が甦る。活きの良い祭鱧のこと、戦前の浪速の祭の様子などが窺え連想の広がるよい句に仕上がつている。

松蘿吹かるるばかり木地師邑

小澤 菜美

まず松蘿さるおがせを説明しよう。霧のよくかかる深山の樹木の幹や枝に垂れ下つて生える地衣類の総称で長さは7メートルにも達する。珍しい夏の季語であ

る。古くから心臓病や肺病、婦人病に効果のある漢方やリトマス色素が取れる植物として珍重している。木地師とは木地のままの器をつくることを生業としている人で朽木邑など有名である。作者は瓢々と風に吹かれている木地師邑ならではの太木から垂れる松蘿を見上げて、その立派さに感動されたのであろう。木地師邑と松蘿の取り合わせのよい素材をみつけられたのがお手柄であらう。

黙々と修羅場演じて蛍の火

北尾 章郎

連作に「明滅の蛍百とも二百とも」があるが旅の宿での蛍狩であろう国内では平家蛍源氏蛍が多い。明滅する光は雌雄間の誘引である。作者は蛍が修羅場を演じている闇に立つておられる。どうして修羅場であるのか。種族保存のために雌雄の熾烈な戦いの絵巻が黙々と繰り広げられる様子をおっしゃつていたのであろう。蛍の飛び交う美しい夕闇のひと時をうまく十七文字の短詩にまとめられている。

長寿課に書類提出夏帽子

能勢 栄子

まず長寿課があることに驚いた。作者とは同じ年で小学校の三年間を共に暮らした同級生である。とすると私も長寿課へ行かなければならない年頃なのか。そんな課

があるとは知らなかった。何という体たらくなのか。作者はこの度両足の手術をされ、支援の申請書でも提出されたのであろう。夏帽子を被られた可愛い栄子さんの姿が浮かぶ。(以下略)

